

まちの話題

▶5月に「信楽の森で『教育』について語り合うピクニック談話会」に参加しました。ここでは、年齢も性別も全然違う人が30人くらい集まりました。保育士さん、学校の先生、お母ちゃんたち、子どもたち、オランダから来た家族もいました。私には少し難しいと思う話でしたが、普段関わることのない人と話が出来てとても勉強になりました。▶6年後にセンター試験が無くなります。代わりに基礎学力とそれまでの体験などが評価されます。私は、勉強がめっちゃ嫌というわけではありませんが、高校に入って毎日出る大量の課題に忙しすぎると感じていました。いろんなことに疑問を持って自分の頭で考えることってすごく大切なことです。先生はよく「勉強しないと将来が大変だ」といって子どもたちを焦らせますが、何が幸せかなんて人それぞれだし、人生なんともなるのかなと思います▶私たちは将来の不安から勉強をしますが、「みんなには可能性がいっぱいあるんだよ」と教えてほしいです。そして今回の話は、その第一歩の希望の話でした。だから私は、もっと多くの同年代の人たちに「もっと楽にしてみよう」と伝えたいです。(玉崎路)

びわこおっぱい塾info

おっぱい塾は、母乳育児を望む母親たちが集う安心スペースとして、2004年から始まり、現在滋賀県内の9カ所で開催されています。どうぞ気軽に遊びに来てね～!

総合案内ブログ 「びわこおっぱい塾」

<http://biwakooppaijuku.blog70.fc2.com/>

こんにちは!母乳育児を楽しむ会「ははこ」は甲賀市で月一回集まっています。妊婦さん、小さな赤ちゃんとママ。ちょっと先輩お母ちゃん、助産師さん。いろんな人が出産、おっぱい、子育てなどの話題でおしゃべり。自分の体験を語りながら、他の方の体験も聞ける会です。毎月第4木曜日10時～12時@甲賀市青少年研修センター和室 注意)7月と8月はかえで会館にて

あまいろだより(天色便り)
あまいろ探偵団、走る!手づくり市民メディア
第23号 特集:もしあなたが学校を作るなら
発行日/2015年6月15日
編集/あまいろ探偵団
(綾牧生・岸田知之・北岡七夏・
きむぎがん・中野和子・藤井朋子)

発行/特定非営利活動法人碧いびわ湖
～大切なことを他人任せにしない。
自分たちで力をあわせてつくる～
〒521-1311滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3番地
TEL 0748-46-4551 FAX 0748-46-4550
info@aoibiwako.org <http://aoibiwako.shiga-saku.net/>



子育て広場、やっています♪

～子どもの野外遊び×親のおしゃべり～
*毎月第2・4月曜日
*守山の目田川or栗東のたまてばやしにて
基本第2月曜はたまてばやしにて、第4月曜は目田川にて行います。但し、天候や諸事情により変更になることがありますので、碧いびわ湖のブログにてご確認ください。お問合せください。

表紙タイトル/岸田知之
*kikito びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを
biwako-no-mori 使用しています(びわ湖の森の間伐材活用)

暮らしのコラム

勝手に決まってしまった「秘密保護法」。「集団的自衛権」って正体は何?「安保法制」って?安倍首相の言っていることの何が本当で何がまやかしか。日本は本当にこのまま戦争に突入してしまうのか。子どもを絶対に戦地に送り出たくない!本当のことを知りたいと守田敏也さんに「戦争と政治」と銘打って講演をお願いした。守田さんは原発や社会問題について熱心に取材をし、全国を駆け巡って安全で幸せな社会の実現に向けて講演活動や執筆活動をされている。二時間の講演が終わってももっと話を聞きたいと守田さんを囲んでの話は続く。

守田さんの講演から見てきたことは「安倍政権は一見強大に見えるが、国民が手を取り合って訴えていけば必ず道は開けるということ」「子どもたちを戦争に行かせないために大事なことは子どもたちと戦争とは何かを繰り返し話し合い、不戦の決意を共に作り上げていくこと。そしてそのキーマンが母であること」「日本だけでなく、アメリカの若者も戦争に行かなくてもよい社会を目指すべきということ」「愛の心こそが戦争を止めるということ」とも希望のあるお話だった。共に母として人間としてこの戦争への流れは絶対に止めなければならないと心を強くした。

私は母であり小学校の教員でもある。子どもの未来を守らねばならない。教育は時に子どもに正しい知識を与えもするが、間違った概念を植え付けてしまう危険も孕む。教師の言葉は子どもに大きく影響を及ぼす。だから責任が重い。感覚を研ぎ澄まし、文科省から降りてきたカリキュラムや教科書の内容にも目を光らせねばならない。私たちが教えたことが戦争を肯定することに繋がるかもしれないと思うと怖くてたまらない。

教育ってなんだろう

松村直子

子どもを産むまでは正直膨大なカリキュラムと次から次にやってくる行事をこなすことで必死だった。子どもとゆっくり話す時間もないから大人で決めた都合のよい形を子どもたちに提示し、やる気を出させて、さも自分たちが決めてやっているように仕向けて檄を飛ばす。やる気のない子には自分だけ嫌なことがあったら逃げていいのかと説得し、褒めたり叱ったりしながら本番に間に合うように持っていく。教師は子どものためと思ってやっているから子どもは嫌とは言わせてもらえない。

私はあそび畑とこりすの会(自主保育サークル)というかけがえのない仲間と出会い、たくさんの大切なことを学んだ。子どもはありのままのままでよいということ。また、せた♪森のようちえんのボランティアスタッフの経験からも子どもには自ら育つ力があり、考える力も未来を作っていく力も十分にあることを学んだ。そこに大人の不必要な声かけはいらぬ。ただ育ちゆく子どもの姿を信頼し見守るだけでよい。それが一番大人には難しい。

教育って何だろう。教科書の中身を大人が決めたルールを教え守らせることか?それでは大人に都合のよい子どもになってしまう。子どもたちが自分の生き方や考え方を仲間と共に培うこと。戦争の問題も然り、原発の問題も辺野古の問題も子どもと共に考えればよいのだと思った。子どもの声をたくさん聴き、共に考え、認め合い、共に幸せな未来を作るために子どもに寄り添える教師でありたいと心から願う。

松村直子...二児の子育て真っ最中の、教員。チョコちゃんのお愛称で、子どもからも慕われる。

あまいろだより



こんな本、いかがですか?

『私の平和論—戦前から戦後へ—』
(日高六郎著 岩波新書)

十数年前、私の子育てが始まった頃、アメリカはイラク戦争をしていた。こどもにおっぱいを飲ませながら考えたこと。戦争は絶対いや。この子に平和な世を。そのためには私に何が出来る? そんな時に読んだこの本。「思想は違っても”戦争反対”でつながればいい」社会学者の日高六郎さんのメッセージが私の希望になった。

小さい声、少しづつかたちが違う意見、だけど皆、小さなしあわせを願っている。それらがわいわいがやがや集まって、毎日の暮らしのことを考えながら、戦争反対でつながる。

1995年に書かれたこの本は、父と子の眼をつないで戦前戦後の100年の時代の流れを追う。戦争をはじめ頃の空気や国の動き、そして敗戦。



『きけわたつみのこえ』を読み、『戦争にたいするたいへん多様な姿勢が表現されている。そのことでは「一億一心」に対抗している。(中略)だれが多様な声に優劣の評点を付けることができよう。まただれが若者の声が反戦一色で染めあげられていないと、批判する権利があるだろう。しかし、戦争とはこの多様な声を殺戮する作業なのだ」と日高さん。

教科書問題にもふれる。1956年には日高さんも執筆に加わった中学三年生の社会の教科書が「軍国主義の反省が強調されすぎている」「原爆の記述が長過ぎ、誇張的」と検定不合格となったこと。

そして、日本国憲法について。世界の憲法の中でも独自の日本国憲法。これを荷なすべき政府が普遍性の感覚に弱く、それを監視すべき民衆がさまざまな差別感情にとらわれているのではないかと日高さんは指摘する。日本国憲法が改定されればその社会的影響は大きい。ひとりひとりの「精神の自由」を大切にしたいという小さな勇気と、この憲法を維持していくために必要な覚悟と苦勞が生み出す大きな勇気とが呼応できれば平和主義にも未来はあるのではないかと日高さんはしめくくる。今、再読したい。(なつ)

蟻の牙

ありませんか?生活の中のこれだけは...というこだわり。小さいことだけど、私一人やっただけで仕方ないかもしれないけれど、でもやっぱりこれだけははずれない...というこだわり。小さいけれど、痛く突き刺す、「蟻の牙」のようなこだわりを紹介いたします。

「自動販売機のジュースは買わない」

福井原発銀座から50kmに住んでいるので、311以降は買っていません。自販機をやめると原発3基分の電力をまかなえるそうで。当時の怖かった思いや、自分の無力さを忘れないためです。

小野 ぶーたん

